『女の一生』における馬車空間の機能

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩田, 麻由子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20742

文学研究論集
第52号　2020. 2

『女の一生』における馬車空間の機能

La fonction de l'espace de la voiture à cheval chez *Une Vie*

博士後期課程　仏文学専攻　2018年度入学
岩　田　麻由子
IWATA Mayuko

【論文要旨】
『女の一生』において主人公ジャンヌにとって重要な旅行は新婚旅行である。ジャンヌの人生の絶頂期とも言えるこの旅行についてはしばしば言及されてきた。この旅以外，彼女はあまり出かけることがない。田舎の暮らしの中で，彼女は馬車で必要最低限の移動しかせず，その移動の様子もだんだんと描写されなくなっていく。
本論では『女の一生』の中で新婚旅行の前後に描かれている箱形の馬車の様子を中心に，ジャンヌにとっての馬車空間はどのようなものであるかについて論じる。そして物語が進むにつれて彼女の移動の描写が少なくなるのはなぜなのか，そのことが表していることについて考察する。

【キーワード】 女の一生，馬車，空間，家族，モーパッサン

はじめに

『女の一生』で主人公ジャンヌの移動において印象的なものは新婚旅行の場面である。そこで彼女が初めて結婚の幸福を感じることから，この旅行についてしばしば言及される。本論ではあえて日常生活における馬車での移動に焦点を当てたい。汽車の登場以前，人々の移動を支えていたのは馬車である。その様子は文学作品においてもたびたび描かれている。馬車は人々の足として，時に様々な文学的記号として働きながら登場する。本論では馬車空間がどのような乗り物であるのかを見るとともに，『女の一生』の中で，ジャンヌにとってどのようなものであるかを論じていく。

1.　馬車という空間

馬車は人びとの交通手段として発展し，長い間活躍した。当初は貴族や高いブルジョワ階級など

研究論集委員会　　受付日　2019年 9 月20日　　承認日　2019年10月28日

一部の人に利用されるものであったが，18世紀から19世紀前半にかけて広く大衆化した。格安の乗合馬車が運行し，それまでは移動の全行程を歩いて行かなければならなかった者も，一部の区間は徒歩，別の区間は馬車を利用するということが可能になり，中産階級や下層階級の移動の範囲は広がり，より容易になった。

文学作品においても田舎生まれの主人公がパリに上京する際，le coucou と呼ばれる一頭立て二輪の小型乗合馬車や，la diligence という四から六頭立ての大型四輪馬車を使っていることが多い。このような乗合馬車はどの席に座るかで利用者の経済事情が見える乗り物であった。la diligence には三つの車室があり，一番前の前仕切り（coupé）という車室は三人掛けの長椅子が一つ設置され，ゆったりと座ることができ，その分料金が一番高かった。二番目の車室は中仕切り（intérieur）と呼ばれ，向き合う形に三人用の長椅子が二つ置かれており，前仕切り（coupé）に比べると窮屈であった。三番目の車室である後仕切り（rotonde）は六人掛けの馬蹄型のベンチが置いてあるが，混雑時には十人ほど詰め込まれることもあり，料金は三つの車室の中で一番安価であった。しかしさらに安価で乗ることができたのが前切り（coupé）の上に作られた屋上席（impérial）であった。この席は馬車が転倒した際には一番危険な席であったが，その安さのおかげでよく利用される席であった。

la diligence は『脂肪のかたまり』の重要な舞台となっている。ブール・ド・スイフはルアンからル・アーブルに向かう六頭立ての大型乗合馬車に乗った。彼女を入れて十人が乗っている。しかしこの diligence には車室の仕切りは無く，進行方向に対して左右に長い座席があり，向かい合うように五人ずつ座っていた。三つの車室に分かれている型とは違い，一つの空間となっているのである。ここではまさに貴族，ブルジョワ，聖職者，下層階級といった，異なる社会階級の人々が乗り合わせている。また『ボヴァリー夫人』においてヨンヴィル＝ラベイの村からパリへ出ている「つばめ」のような乗合馬車も，『脂肪のかたまり』ほど明白に階級差が演出されることはないが，様々な人々が混ざる空間として描かれている。馬車はどの馬車に乗るか，またどの席に座るかによって経済状況が明らかになる空間であり，また社会における階級の異なる人々が居合わせる空間なのである。

2. 密室としての馬車

当時の社会で交通手段として発展した馬車は文学の中にも数多く登場している。作品の中で馬車はどのような機能を持っているのだろうか。ここでは交通手段としてだけでない，別の機能について見ていく。そして無蓋の馬車よりも，より空間として密室の度合いが高い箱形の馬車（郵便馬車や辻馬車）に注目して見ていく。

まずは『ボヴァリー夫人』である。この作品ではパリで再会したエンマとレオンが辻馬車に乗る有名な場面がある。この場面では馬車の中の様子は一切描かれない。二人を乗せた馬車は目的もなくただひたすらパリ中を走り回ることを命じられる。停車することを許されず，行先もわからぬま

ま馬を走らせる御者の困惑と疲労が描かれている。ここで馬車はもはやどこかへ移動するための手段としてではなく，誰にも見られずに二人きりになるための空間として表されている。

次に同じように姦通について描かれている『ベラミ』においては馬車の内部の様子が露骨に描かれていることが以下の引用からわかる。

> Il la sentait contre lui, si près, enfermée avec lui dans cette boîte noire（…）Tout à coup il sentit remuer son pied. Elle avait fait un mouvement, un mouvement sec, nerveux, d'impatience ou d'appel peut-être. Ce geste, presque insensible, lui fit courir, de la tête aux pieds, un grand frisson sur la peau, et se tournant vivement, il se jeta sur elle, cherchant la bouche avec ses lèvres et la chair nue avec ses mains.[1]
>
> 彼女が自分にぴったり寄り添うのを感じる。この暗い箱に自分とともに閉じ込められた彼女を非常に身近に感じる。［中略］突然，彼女の足がふたたび動きだすのを感じた。彼女はひとつ身ぶりをした。それはいらいらとして潤いのない動作だった。もしかしたらこちらを誘っているのかもしれない。このかすかな身ぶりに，彼は頭の先からつま先まで，総毛立った。そして勢いよく向き直り，彼女に覆いかぶさり，唇で彼女の唇を，両手でその柔肌を探った。[2]

人目をはばかる関係の男女において，馬車がこのような空間的役割を負うことは当時の社会の中で珍しいことではなかった。公共の乗り物であり，乗り込めば密室になる辻馬車について，小倉孝誠は「他者の視線を避けるために動く密室の中に避難した二人の恋人は，もっともあからさまに不特定多数の人々の好奇心に満ちた，無遠慮な視線にさらされるオブジェになる。辻馬車は私生活と公共性，隠蔽と露出がきわめて淫靡なかたちで接しあう物語装置だと言えよう」[3] と述べている。馬車の内部は私的な空間，よりスキャンダラスな空間としても存在していたのである。

モーパッサンが『女の一生』を書くにあたって参考にしたことは言うまでもない『ボヴァリー夫人』や，1885年に出版された『ベラミ』では馬車の空間が男女の情欲の場所として表れていた。つまりモーパッサンにとって馬車空間がスキャンダラス表象としての機能を持つことは当然のことであったと言える。だが『女の一生』に現れる馬車では，この機能は働いていない。では『女の一生』の馬車空間は一体どのようなものであろうか。

---

[1] Maupassant *Bel-Ami*, Paris, Louis Conard, Œuvres complètes de Guy de Maupassant ; XIII, 1910, pp. 128–129

[2] モーパッサン『ベラミ』中村佳子訳，角川文庫，2013，p.108

[3] 小倉孝誠『挿絵新聞リュストラシオンにたどる　19世紀フランス　愛・恐怖・群衆』人文書院，1997，p.65

3. 『女の一生』における馬車種の変遷

『女の一生』で描かれている馬車は物語が進むにつれて，種類が変化していく。まず主人公ジャンヌがどの場面でどのような馬車に乗っているのかを確認する[4]。なお，馬車の内部の空間が描かれていないもの，具体的な馬車の型が表記されていない箇所は除いている。場面は物語の時間軸にそって１から番号を振った。また馬車という単語が複数の語で言い換えられている場面がある。その場合は言い換えの単語も馬車の行に記載した。

〈ジャンヌが利用する馬車種の変化〉

場　　面	馬車（言い換え）	馬車の型
(1)レ・プープルへ	la calèche（la berline）	箱形四輪馬車
(2)新婚旅行（家から船場まで）	la berline	箱形四輪馬車
(3)あいさつ回り	la calèche（la berline）	箱形四輪馬車
(4)あいさつ回り（出産後）	le phaéton	無蓋四輪馬車
(5)引っ越し	la charrette（la carriole）	無蓋二輪馬車
(6)汽車の駅から家へ	la cariole	幌付き二輪馬車

（1）から（3）までの馬車はジャンヌの両親が所有しているものである。馬車を表す単語として la calèche と la berline が使われている。la calèche は幌の付いた無蓋の四輪馬車で，乗客は進行方向を向いて座る。la berline は箱形の四輪馬車で，乗客は向かい合う形で座る。（1）のレ・プープルへの移動の場面でジャンヌの両親である男爵夫妻は進行方向を向いて座り，ジャンヌと女中のロザリはその向かい側に，進行方向を背にして座っている[5]ことから，la calèche という語が使われているものの，男爵夫妻の所有している馬車は la berline（箱形の四輪馬車）であることがわかる。また（4）からは馬車の型が変わっている。le phaéton は無蓋の四輪馬車であり，その中でも一頭で引くことのできる軽装なものをジャンヌの夫であるジュリアンが購入した。（5）の la charrette は無蓋の二輪馬車である。これは女中のロザリの息子ドゥニの馬車で，引っ越しの際，雨が降っており，ロザリはジャンヌと自分を入れるように傘を差しながら馬車に乗っている。（6）の la carriole は幌付きの二輪馬車であるが，小さな手押し車，ぼろ馬車との意味合いもあり，同じ二輪馬車でも la charrette よりはランクが落ちるものである。

表から，物語が進むにつれてジャンヌの乗る馬車のランクは徐々に下がっていることがわかる。馬車を所有するには経済力が必要であったため，ジャンヌの経済状況が徐々に困窮していることが

---

[4] 鹿島茂『新版　馬車が買いたい！』，白水社，2009を参照。

[5] Maupassant *Une Vie*, Édition d'André Fermigier, Gallimard, 1974, p.35 : Puis elle se remit en marche et monta péniblement dans la voiture dont tous les ressorts plièrent. Le baron s'assit à son côté, Jeanne et Rosalie prirent place sur la banquette à reculons.

見て取れる。また（1）から（3）までは箱形馬車のため密室空間となるが，（4）から（6）の馬車は無蓋のためそのような空間にはなっていない。

次に『女の一生』における馬車空間がどのような機能を持つものであるかを見ていく。上記の表から，箱形の馬車での移動の様子が描かれているのは（1）から（3）の場面であった。特に（1）と（3）の場面は，物語の中でジャンヌが幸せの絶頂を迎える前と後に位置する場面である。（1）結婚をする前の馬車空間と（3）結婚をした後での馬車空間について次章で述べる。

4. （1） レ・プープルへ：結婚以前の馬車空間の機能

物語冒頭，ジャンヌが家族とともにレ・プープルの屋敷へ向かう場面である。この場面では馬車空間の中にいるジャンヌと，馬車の外の景色との対比が印象的である。また乗車している人々の中で，ジャンヌだけが生き生きとして生命力にあふれていることがわかる。以下少し長く引用する。

> La bourrasque gémissante battait les vitres, inondait la chaussée. La berline, au grand trot des deux chevaux, dévala rondement sur le quai, longea la ligne des grands navires dont les mâts, les vergues, les cordages se dressaient tristement dans le ciel ruisselant, comme des arbres dépouillés ; puis elle s'engagea sur le long boulevard du mont Riboudet. Bientôt on traversa les prairies ; et de temps en temps un saule noyé, les branches tombantes avec un abandonnement de cadavre, se dessinait gravement à travers un brouillard d'eau. Les fers des chevaux clapotaient et les quatre roues faisaient des soleils de boue. On se taisait ; les esprits eux-mêmes semblaient mouillés comme la terre. Petite mère se renversant appuya sa tête et ferma les paupières. Le baron considérait d'un œil morne les campagnes monotones et trempées. Rosalie, un paquet sur les genoux, songeait de cette songerie animale des gens du peuple. Mais Jeanne, sous ce ruissellement tiède, se sentait revivre ainsi qu'une plante enfermée qu'on vient de remettre à l'air ; et l'épaisseur de sa joie, comme un feuillage, abritait son cœur de la tristesse. Bien qu'elle ne parlât pas, elle avait envie de chanter, de tendre au-dehors sa main pour l'emplir d'eau qu'elle boirait ; et elle jouissait d'être emportée au grand trot des chevaux, de voir la désolation des paysages, et de se sentir à l'abri au milieu de cette inondation.[6]
>
> 突風がうめき声をあげながら馬車の窓を叩き，道路を水浸しにする。速足の馬二頭に引かれ，馬車はかなりの速度で河岸へと下っていった。さらに列をなして河に停泊する大型船の横を過ぎる。船の帆柱も，帆桁も，舫い網の類も，そろって雨に濡れ，枯れ木のように悲しげに突っ立っていた。やがて馬車は，長々と続くモン・リブーデ大通りに出た。まもなく，

[6] Maupassant, op. cit., pp.35–36

馬車は牧草地のなかを進みはじめる。雨に朦朧とかすむ風景を眺めていると，ときおり死体のように力なく枝を垂らした柳の木がぼんやりと浮かび上がってくる。馬の蹄鉄がばちゃばちゃと音をたて，馬車の車輪は泥だらけだ。心まで濡れそぼってしまったかのように，皆，黙り込んでいた。男爵夫人は背もたれに頭を預け，上を向いたまま目を閉じている。男爵は，けだるい眼差しで雨に濡れた単調な風景を眺めている。ロザリは膝の上に籠を抱き，動物たちがぼんやりと佇むときのように，凡庸な物思いにふけっていた。だが，ジャンヌは違った。この生暖かい雨が降り注ぐなか，これまで閉じ込められていた植物が外に出されたときのように，生きる力を取り戻しつつある自分を感じていた。あふれる歓びが厚く茂る草葉のように心を守り，悲しみを寄せ付けようとしないのだ。じっと黙っていたものの，本当は歌いだしたかった。窓から手を伸ばし，拳に受けたしずくを飲んでみたかった。ぐんぐん進む馬車に乗っていること，窓の外の物悲しい風景を眺めること，そして降りしきる雨にもかかわらず，自分は濡れない場所にいること。ジャンヌはそれだけで嬉しかった。[7]

馬車の外に降りしきる雨と，雨に濡れる船や牧草地の様子が描かれている。モーパッサンは水を巧みに扱う作家であるが，この場面でも土砂降りの雨の様子が inonder, dans le ciel ruisselant, un brouillard d'eau, les fers des chevaux clapotaient, les quatre roues faissaient des soleils de boue といった表現で示されている。しとしとと降る雨ではなく，水分たっぷりの雲から水があふれ落ちるような天気であり，雨が作る靄，蹄鉄と車輪がぬかるみを進むびちゃびちゃという音がいまにも聞こえてきそうである。そして濡れる景色は柳の木の描写にあるように，もの悲しく，死のイメージと結びついている。語り手は景色の様子を大きく描いた後で，徐々に馬車に焦点を当てていく。馬車の足元を描写すると，次に語り手の視線は馬車の内部に移る。ひどい天気に呼応するように車内には物憂げな雰囲気が漂っている。語り手は男爵夫人，男爵，女中のロザリの順にその様子を描き出す。ただ一人，ジャンヌだけが修道院から出ることのできた歓びにあふれ，自身の生命力を感じており，外の物悲しい世界との対比が強調されている。女中のロザリが「動物たちがぼんやりと佇むときのように」いるのに対し，雨の中生き生きとするジャンヌはどこか植物的である。ジャンヌは馬車の窓から手を伸ばして雨を飲みたいと思うが，この描写も雨水の恵みを受けて植物がつるを伸ばすイメージと重なる。外の荒れた天気の中で馬車はまさに à l'abri＝避難所である。その保護された場所から手を伸ばしたいと感じるジャンヌは，まさに修道院から出て新たな未来に進む彼女の期待に満ちた心境を表すものである。しかしここで重要なことは，ジャンヌは手を伸ばしたいと思いはするものの，行動には移さないことである。このことは今後のジャンヌの人生を暗示していると言える。

次にジャンヌにとっての避難所であり保護下である馬車空間の，この部分に続く車内の様子をも

[7] モーパッサン『女の一生』永田千奈訳，光文社，2011，pp.14-15

う少し追ってみる。

> La baronne, peu à peu, s'endormait. (…) Son mari se pencha sur elle, et posa doucement, dans ses mains croisées sur l'ampleur de son ventre, un petit portefeuille en cuir. Ce toucher la réveilla ; et elle considéra l'objet d'un regard noyé, avec cet hébétement des sommeils interrompus. Le portefeuille tomba, s'ouvrit. De l'or et des billets de banque s'éparpillèrent dans la calèche. Elle s'éveilla tout à fait ; et la gaieté de sa fille partit en une fusée de rires. Le baron ramassa l'argent, et, le lui posant sur les genoux : « Voici, ma chère amie, tout ce qui reste de ma ferme d'Életot. Je l'ai vendue pour faire réparer les Peuples où nous habiterons souvent désormais. » Elle compta six mille et quatre cents francs et les mit tranquillement dans sa poche. C'était la neuvième ferme vendue ainsi sur trente et une que leurs parents avaient laissées. Ils possédaient cependant encore environ vingt mille livres de rentes en terres qui, bien administrées, auraient facilement rendu trente mille francs par an.[8]
>
> 男爵夫人は眠りに落ちていった。［中略］男爵は夫人のほうに屈みこみ，その手のなかに小さな革財布をそっと置いた。革財布の感触に夫人は目を覚ました。突然起こされたので，寝ぼけ眼のまま財布を見つめる。財布が手から落ち，金貨や札が馬車の床に散らばった。驚いた夫人は完全に目を覚ました。ジャンヌが笑い出す。本来の陽気さがはじけて出てきたような笑いだ。男爵は金を拾い集め，夫人の膝の上に置いた。「なあ，おまえ，エルトの農場を手放したのに，残ったのはこれだけさ。あの農場を売った金でレ・プープルの屋敷を修理させたからね。これからは，あの屋敷で過ごすことが増えるだろうし」夫人は六千四百フランの金を数え，静かにポケットにしまった。親から引き継いだ三十一の農場のうち，これで九カ所を手放した。それでも彼らには二万フランの地代収入があり，うまく運用すれば，年間三万フランの収入は易々と確保できるはずだった。[9]

描かれているのは家族の中で交わされる金銭の話，つまり家計の話である。馬車を所有することができる経済的な余裕があったことは，この会話からも裏付けされるが重要なのは裕福であるかないかといったことではなく，家計の話になる前の描写である。眠りかけている夫人の手に革財布を置き，驚いた夫人の手から財布が落ち，中身が散乱する。その両親の様子を見て，今までの沈黙を破りジャンヌが笑う。お金が床に落ちても誰も取り乱すことはない。夫人がお金を拾う様子もひどく簡単である。ここではお金を使った遊び，親密な間柄だからこそ許されるじゃれ合いの様子が描かれている。車内には親密な空気が充満している。馬車空間が家にいるかのような家族の空間として立ち現れている。

---

[8] Maupassant, op. cit., pp.36–37.

[9] 永田千奈，前掲書，pp.15–16

結婚以前の馬車はジャンヌの今後を暗示しながら，親密な家族空間として機能しているのである。では次に結婚後の（3）の馬車空間を見ていく。

5. (3) あいさつ回り：結婚後の馬車空間の機能

新婚旅行では幸福の時にいたジャンヌ夫妻だったが，旅行を終え，夫婦関係は冷め切ってしまった。ある日ジャンヌと夫のジュリアンは男爵夫妻とともに，近くに住む貴族たちにあいさつ回りに出かけることになる。倹約家のジュリアンは御者を雇わず，自ら手綱を取る。他にも馬車で出かけるのに必要な馬や，小間使いなどを用意するが，それらがあまりにもちぐはぐで滑稽だったため（借りてきた馬は老馬と若い馬，小間使いのマリウスの服はシモン爺さんのお古ですべてがぶかぶかであった），ジャンヌと男爵夫妻は大笑いする。しかしジュリアンは激高し，小間使いに平手打ちをくらわし，男爵に暴言を吐く。このような暗い雰囲気の中，一行は出発し，以下引用箇所は子爵家への訪問が終わった帰り道の様子である。

> Dès qu'ils furent enfermés dans la calèche, Jeanne et son père, malgré l'obsession pesante qui leur restait de la brutalité de Julien, se remirent à rire en contrefaisant les gestes et les intonations des Briseville. Le baron imitait le mari, Jeanne faisait la femme, mais la baronne un peu froissée dans ses respects leur dit : « Vous avez tort de vous moquer ainsi, ce sont des gens très comme il faut, appartenant à d'excellentes familles. » On se tut pour ne point contrarier petite mère, mais de temps en temps, malgré tout, père et Jeanne recommençaient en se regardant. Il saluait avec cérémonie et, d'un ton solennel : « Votre château des Peuples doit être bien froid, Madame, avec ce grand vent de mer qui le visite tout le jour ? » Elle prenait un air pincé, et minaudant avec un petit frétillement de la tête pareil à celui d'un canard qui se baigne : « Oh ! ici, Monsieur, j'ai de quoi m'occuper toute l'année. Puis nous possédons tant de parents à qui écrire. Et M. de Briseville se décharge de tout sur moi. Il s'occupe de recherches savantes avec l'abbé Pelle. Ils font ensemble l'histoire religieuse de la Normandie. » La baronne souriait à son tour（…）[10]
>
> ジャンヌと男爵は，ジュリアンの乱暴な態度に依然として気づまりな重苦しさを感じていたものの，馬車の扉が閉まるや否や，プリズヴィル夫妻のしぐさや喋り方を真似て大笑いしはじめた。父である男爵が夫を真似，ジャンヌが夫人を真似る。だが，母である男爵夫人は，尊敬する子爵夫妻に対し，失礼な態度をとるのは許せないとばかりに二人をたしなめた。「そんなにふざけるのは失礼ですよ。あの方たちは実に折り目正しい，良いお家の方なんですからね」男爵夫人を怒らせないように黙り込んだ二人だったが，それでも気がつけば，再

[10] Maupassant, op. cit., pp.134–135.

びちらちらと視線を交わし合っている。「レ・プープルのお屋敷はお寒うございますでしょう，奥様。日がな一日，海から強い風が吹きつけるのでしょうね」男爵は仰々しくお辞儀をし，厳かな声で言う。水浴びする家鴨のように，小刻みに頭を揺らしつつ，ジャンヌが気取ったつくり声で答える。「あら，私ここにおりましても，一年じゅう忙しくしてますことよ。ええ，あちらこちらに親戚がおりますでしょう，お手紙を書くのも大変で。ええ，主人はすべて私に任せっぱなしですの。主人はね，ペル神父様と研究に勤しんでおりまして，なんでも二人でノルマンディの宗教史を本にまとめるとかで」男爵夫人もつい，くすりと笑う。[11]

重苦しい雰囲気の中にも，場面（1）と同様，ジャンヌの家族の本来の陽気な性格がよく表れている箇所である。ここで注目したいのは，結婚してジャンヌの夫となったジュリアンがこの家族の親密な空間を共有していないということである。引用前にも述べたように，ジュリアンは御者を自ら買って出ている。馬車という乗り物，その中でも特にジャンヌたちが乗っているような箱形の馬車において，御者は内部ではなく，外部にいるものであり，客席とは切り離されている。御者は寒さから酒飲みになることが多く，社会的地位としては下層で，上流階級に雇われる身であった。馬車が異なる階級の人々が同時に居合わせる空間だと前述したが，その中でも御者だけは客たちと混ざることは無く，孤独な存在であったのである。ジュリアンが御者の役を選ぶことで，図らずもジャンヌとジュリアンは馬車の内と外に分かれ，絶対に混ざることのない関係が強調されている。

箱形の馬車における密室性はスキャンダラスな空間になることを前述したが，ジャンヌの人生においては馬車の空間は家族との親密な空間，または夫（ジュリアン）との決裂が暗示される空間であり，それ以外として立ち現れることがない。『女の一生』においてはジュリアンの姦通が描かれるが，それも馬車以外の空間で行われることであり，馬車は最初から最後までジャンヌにとっての家族の空間のままである。上述の表では（3）以降は箱形の馬車に乗る機会が無くなっていく。そのことは物語の展開とどのような関連があるのだろうか。

6. 馬車表象の減少から見るジャンヌの人間関係

（4）ではジャンヌはジュリアンと二人で馬車に乗り，侯爵家を訪問する。この時の馬車種は軽装の無蓋四輪馬車である。相変わらず手綱を取るのはジュリアンであり，屋根も無いことから箱形の空間は存在していない。馬車の空間はジャンヌにとっての家族の空間であるという観点から見ると，やはりジャンヌとジュリアンの間には家族としての親密な関係が構築できていないことが表れている。また引っ越しが行われる（5）では，とうとうジャンヌは馬車の所有者ではなくなっている。レ・プープルの屋敷から新居への移動に同乗するのは，女中ロザリとその息子のドゥニである。姉妹のように育ったロザリがいるとはいえ，男爵夫妻と夫が亡くなったジャンヌは孤独であ

[11] 永田千奈，前掲書，pp.160-161

る。馬車は今までの四輪のものから二輪になっているが，車体を支える車輪の数が少なくなったことは，家族としてジャンヌを支える人間が少なくなったことを暗示しているかのようである。(6) は生まれたばかりの孫を抱いて汽車の駅から家へ帰る場面である。ここでは放蕩息子が近く帰ってくるとの嬉しい報を聞き，また初めて孫を抱いたジャンヌの静かな希望と呼応するような景色が描かれている。

> Le soleil baissait vers l'horizon, inondant de clarté les plaines verdoyantes, tachées de place en place par l'or des colzas en fleur, et par le sang des coquelicots. Une quiétude infinie planait sur la terre tranquille où germaient les sèves. La carriole allait grand train, le paysan claquant de la langue pour exciter son cheval.[12]
>
> 金色の菜種の花，血のように赤いコクリコの花が点在する緑の草原を照らしながら，太陽は地平線に沈もうとしていた。あふれるばかりの精気を湛えつつも，静まりかえった大地はどこまでも穏やかだ。御者を務める農夫が，舌を鳴らして馬を煽った。馬車はかなりの速度で走っていく。[13]

（1）の土砂降りの場面と対照的な穏やかな自然の風景が描かれている。（1）ではジャンヌは生命力あふれる植物のイメージをまとっていた。この場面ではジャンヌの様子は直接描かれていないが，精気を持つ静かな大地は，年を取り，若いころの激しい情動は消え，息子や孫と穏やかに暮らすことを望むジャンヌを想起させる。また沈む太陽はジャンヌが人生の後半にいることを示すかのようである。この場面では馬車は（1）や（3）のような家族の空間とは言い難い。それはここで描かれている馬車と穏やかな景色だけでは，今後孫とジャンヌがどのような家族になるかはわからないからである。馬車と風景の描写からジャンヌの人生を暗示するように始まった物語の最後で，作者は未だ続く彼女の人生を今度は馬車と風景によって曖昧に描いたのである。

おわりに

『女の一生』において主人公はあまり出かけない。これは年齢を重ねていくことへの孤独や，彼女が生活する閉鎖的な環境，閉鎖的な心情を表しているだけではない。しばしば馬車と言う乗り物には経済状況の視覚化や，多様な階級の人々の混交，そしてスキャンダラスな密室空間というような機能があったが，この作品で登場する馬車空間は後半の二つの機能としての働きは無いように思われる。本作における馬車空間はジャンヌにとって自分を保護してくれる家族の空間として機能している。ジャンヌが経済的に困窮していく実態や，彼女の家庭が壊れていく状況は馬車が家族との

[12] Maupassant, op. cit., p.313
[13] 永田千奈，前掲書，p.434

親密な空間であるという視点からも読み取ることができるということが考察できた。作者は主人公の家庭が壊れていく様を，徐々に馬車の描写をしないことによって読者に感じ取らせているのではないだろうか。

参考文献

Maupassant, *Une Vie*, Édition d'André Fermigier, Gallimard, 1974
Maupassant, *Bel-Ami*, Paris, Louis Conard, Œuvres complètes de Guy de Maupassant ; XIII, 1910

モーパッサン『女の一生』永田千奈訳，光文社，2011年。
モーパッサン『ベラミ』中村佳子訳，角川文庫，2013年。
＊
アラン・コルバン『レジャーの誕生』渡辺響子訳，藤原書店，2000年。
アラン・コルバン『時間・欲望・恐怖　歴史学と感覚の人類学』小倉孝誠，野村正人，小倉和子訳，藤原書店，1993年。
モーパッサン『脂肪のかたまり』高山鉄男訳，岩波文庫，2004年。
ラスロー・タール『馬車の歴史』野中邦子訳，平凡社，1991年。
小倉孝誠『挿絵新聞リュストラシオンにたどる　19世紀フランス　愛・恐怖・群衆』人文書院，1997年。
鹿島茂『新版　馬車が買いたい！』白水社，2009年。
吉田廣『フランス小説　女の一生を斬る―小説の成り立ちを探る―』大阪経済法科大学出版部，2004年。
＊
Thierry Poyet, *Maupassant une littérature de la provocation*, Édiotion Kimé, Paris, 2011
Emmanuéle Grandadam, *Contes et nouvelles de Maupassant : pour une poétique du recueil*, Publication des universités de Rouen et du Havre, 2007